

「ぼんやり」と「はつきり」の間

東京都立大学教授、中央大学兼任講師

瀬尾 育生



二つの大学で教える先生も多い。法学部で教える、高見順賞受賞（詩集『デーブ・パープル』）の詩人が日頃それぞれのキャンパスで感じるものは何だろう。中央大学の好ましい光景、そして大学による学生のタイプの違い……。大学風景とキャンパスの雰囲気現象学。



私がいま学生である人たちに伝えたいのは、何かこう「さわさわ」した感じである。それはこういう感じだ。

学生たち、猫たち、そして図書館

私は法学部でドイツ語を教えている。非常勤講師（中央大学では兼任講師と呼ばれている）なので、週一回しか来ない。本務校（つまりもともとの勤務先）は都立大学なので、だいたい八王子市南大沢と八王子市東中野のあいだを行ったりきたりしていることになる。

中央大学に勤めるのはとても気持ちがいい。学生諸君が優秀である（あ、これはほんぶんおせじ）。常勤の先生方や事務の人たちのサービスがとても行き届いている（これはほんと）。キャンパス全体に活気がある。食堂のメニューの量と安さは抜群だ。桜林の下のベンチで風に吹かれながら日が暮れるまで人と話しこむのは最高の気分だ。

私は猫好きなので、野良猫たちがたくさんいるのもうれしい。学生たちが猫を可愛がっている。昼ごはんを分けてやったり、猫をお腹に乗せて昼寝したりしているのは心温まる光景だ。などと言っているとはてしなく猫の話題になってしまっ

うだが、つまり中大の、こういうたくさんの気に入った点の中で、とりわけ私が入っているのは総合図書館である、というところへ話を持っていきたかったわけだ。

この図書館は、私が今まで使ってきたなかでもっとも私好みの図書館だ。日常的に通って活用するのにスケールの大きさと機能が最適である。館員の人たちのサービスもいい。私は夜型なので、休暇中も夜九時まで開館しているところなど、「図書館の鏡」と言いたくなるくらいだ。開架も閉架も充実しているが、教員は閉架書庫への立ち入りが許されているので、授業の後などにそこで時間を過ごすことがよくある。たいていは授業で疲れてきているし、その後に予定があったりするので、本を探し出すと、借り出してそそくさと出てきてしまうのだが、そうしながらいつも、もつとここに居られたらなああと、後ろ髪を引かれる思いがする。

たまに時間の余裕のあるときには、書庫をあちこち歩き回って目に付いた本を次々に開いたり閉じたりして何時間もぼつとしている。古い本や雑誌のバックナンバーがそろつてい

るから、いつのまにか遠い時間のなかに迷い込んだ気分になる。どういう本を探してきたのだったか忘れてしまって、こうやってぼんやり本に取り囲まれていると、まわりで本たちがざわざわと話し掛けてくるような気がする。つまりこういう「ざわざわ」した感じ。

検索してまっしぐらに目的の情報にアクセスする、というのではない回り道。回り道しているうちに何を検索していたのだったかも忘れてしまつて、何をすることもなく、まわりで「ざわざわ」している情報や声や文字に晒されている、という感じ。大学というのは、こういう「ざわざわ」したところのではないだろうか、などと、いま学生である人たちに言ってみたくなつたというわけな



多摩キャンパス「桜広場」で

のだ。

大学と学生の「タイプ」について

ところで、この原稿に求められているのは大学さまざま、というようなテーマなので、中央大学と都立大学との学生のタイプの違い、のようなことを書かなければならない。大学による学生の「タイプ」の違い、というようなものがほんとはあるのかどうか。こういう類型学はけっこうあちこちでささやかれているが、だいたい皇帝主義時代の人種理論のようなもので、いかがわしいものである。私もまあ、いかがわしいものが嫌いではないので適当に書いてみるが、もちろんあまり信用しないでもらいたい。私は都立大学ではすべての学部 of 学生を知っているが、中央大学では法学部の学生諸君しか知らない。だいたい比較すること自体が無茶なのだが、強引にこう言ってみることにしよう。都立大学の学生はなんだか「ぼーっ」としている。中央大学法学部の学生は「はっきり」している。

「はっきり」しているとはどういうことか。よく勉強して、試験などもよくできる。活動的だ。進路などもだいたい決つていて迷いが無い。もち

ろんそういうことも含まれているのだが、「はっきり」していることは「ぼーっ」としていることよりいいことかというところ、そう簡単にはいかなないというのがなかなかむずかしいところだ。

こんなことがあった。二年生のドイツ語中級の授業で、アルトゥール・シュニッツラーという作家の小説をテキストにした。シュニッツラーは「世紀末ウィーン」を代表する小説家・劇作家だ（といってもドイツ語には「世紀末」というコトバはない。「世紀転換期」といって、一九一〇年代くらいまでを含んでいる）。小説という形式が一九世紀を通じて成熟してきて、それが二〇世紀へ転回し開かれてゆくところ、この作家が象徴しているのは小説的な言語がもつとも高度な達成を果たしている頂点のようなところだ。だが一方で、登場する人々の意識と無意識の中には社会的な退廃が深くしのびこんでいる。彼はフロイトの同時代人で、二人の間には相互の影響が濃厚に認められる。文章は細部までおどろくべき高度な小説的技巧に貫かれているが、そこには同時に性的な暗示や退廃の寓意や精神的なコノテーションが隠されている。

中級外国語の時間ほど、一つのテキストをゆっくり、じっくりと読む機会は他にないが、そんな

ふうにはゆっくり、精密に読み進んでいると、隠された暗示や照応関係がごろごろと見つかった。どうだ「世紀末ウィーン」というのは凄いだろ、というようなことを毎時間しゃべり、毎時間何度も「世紀末ウィーン」「世紀末ウィーン」と叫んでいたと思う。

さあ試験です

さて学年末の試験がやってきた。中央大学法学部の学生諸君はもちろん優秀なので、和訳の問題などはみんなとてもよくできる。だが例外はどこにでもあって、さっぱりあきまへんという人たちがいつも何人かはいるので、彼らを救済すべく、だれにでも出来る問題を一つ入れておくことにした。「この作品の作者アルトゥール・シュニッツラーはいつの時代のどこの国の作家か書きなさい」。これで、無条件で20点あげようというのだ。これはほとんど、空くじなしのくじ引きみたいなものだ。

ところが、である。

意外にも、この問題が平均点を大幅に引き下げることになってしまった。ほとんど誰もできなかったのだ。むずかしい和訳の問題はともよく

できているのに、この問題に対する解答ときたら、「第二次大戦のころのドイツ人」というのはまあいいとして、「産業革命の時代のイギリス人」とか「二〇世紀のデンマークの人」などというものもあった。これ、ドイツ語の授業なんだけど。

ノイズははっきり「カット」

どうしてこういうことが起こったのか、何週間か考え込んでしまったが、とりあえず到達した結論はこういうものだ。

つまり、これには高度な「選択」の能力が関わっているにちがいない。たとえば高校の高学年にもなれば、志望校の入試科目によって聞くべき授業と聞かなくてよい科目とがはっきりとわかる。このとき効率的にエネルギーを使うために、聞くべきものには耳を開き、聞かなくてよい科目にはボタンと耳を閉じる。こうしてエネルギー節約のために訓練された選択の技術は、大学の授業でも遺憾なく発揮されて、「試験は和訳」と思っているかぎり、それ以外のものは「ノイズ」として自動的に削除される。授業中、訳読のときは「はっきりと」耳は開いているのだが、それ以外の話になると、耳がボタンと閉じられていたのである。



蔵書 170 万冊、中大図書館は使い勝手も一番の私好み

これは情報に対して意識の志向性が「はつきり」していることを意味している。それは正確に情報を選択し、検索する。無選択に、「ぼんやり」と雑音に感覚を晒す、などという無駄なことはいないのである。

こういう高度な選択や転換の能力については、人づてにこんな話も聞いた。

他学部のある教授の講義はとても人気がある。受講生も熱心で、授業時間中もちろん私語などまったくしない。講義に集中して耳を傾け、ジョークには笑い、講義が核心部に迫ると、鉛筆を走らせる音だけが大教室に聞こえる、というぐあいである。

ところが、終業のチャイムが鳴ると、先生の話はまさに核心部の余韻をたたえつつ、もつとも重要なエンディングにさしかかっているというのに、学生たちはバタバタとノートを閉じ、カバンにしまい、つぎつぎに席を立つのだという。別に次の授業に急いでいるというのではない。これは「はつきりした」選択や転換の能力が、ほとんど反射的に作動するほどに訓練され、陶冶されているということなのである。

心が「ざわざわ」してませんか

しかし検索や選択のために、こんなにセルフ・コントロールができてしまうというのは、ほんとはたいへん不幸なことなのではないだろうか。たしかに機能的で効率的ではあるけれど、これだと、

自分の中から、いまは自分にもわからない新しい欲望を見つけ出したり、いままで見たことのない新しい志向性を呼び覚ましたり、といったことができなくなってしまう。つまり一言でいうと、これ、人生はもう終わっている、ということなんじゃないの。

大学は「ざわざわ」しているところである。「ざわざわ」していることがいちばん大切なことである（もちろん授業中ざわざわ私語するのはダメですよ）。いまの自分からすれば回り道、無駄、雑音だと思われることこそが、自分の中から新しい欲望を呼び出して、自分を変貌させてくれる。だからあなたももつと心が「ざわざわ」しているほうがいい。そんな特別な時間は、大学時代を過ぎってしまうと、たぶん二度とやってこないんだから。

